

私のふるさと

浮き草のよう

岡田 安弘

「出身はどちら？」と聞かれ、いつも返事に困る。北朝鮮の清津（チョンジン）で生まれ、2歳まで過ごす。父の転勤で京城（現ソウル）へ。敗戦で京都に引揚げたのが5歳。高校時代から就職前までは大津。ひと昔前、枚方に落ち着くまでに福井、西宮、豊中、松山、博多、奈良など転々とする事15回。浮き草のようなものだ。

朝鮮半島は日本の植民地だった。父は当時の青年らしく新天地を求め、結婚と同時に清津の電力会社に就職した。清津は中国との国境をなす鴨緑江（おうりょっこう）の南、日本海に面した極寒、凍土の都市。ロシア国境も遠くない。日本人拉致の船が出入りした港がある。最近では漂流漁船の基地として知られる。記憶にはないが、そこが生まれ故郷。

父の転勤がなければ生存は危うかったかもしれない。敗戦と同時に「北」にソ連軍が侵攻、爆撃の混乱下で略奪、暴行、飢餓がまん延。故郷に戻れずに亡くなった日本人は3万数千人といわれる。

この原稿を書き始めたとき、朝鮮半島の南北首脳会談が開かれた。金正恩・朝鮮労働党委員長の破顔一笑、融和ムード満点の光景が世界を駆け巡る。豹変ぶりに驚く。とっさに思ったのは、とうとう経済が破綻したのではないかという事だ。

トランプ大統領との米朝首脳会談が近づく。「小さなロケットマン」「老いぼれ狂人」と蔑称で、のしり合った二人だ。どんな表情で向き合うのか想像し難い。

事前協議が水面下で展開している。米国の意向は、「北」が非核化を完全に履行すれば体制の保証と経済制裁の解除を約束すると言う。ただし、要求をのまねば「体制崩壊だよ」とクギを刺す。

拉致あり、血の粛清あり、国際協約を反古にして核を備蓄してきた国が相手だ。一筋縄では行きそうにない。

トランプ大統領は手柄がほしい。自分の政策が

審判される中間選挙が秋に控える。手打ちを急いで、肝心の非核化が置き去りにされはしないか心配だ。二人とも主役を任じる。どちらかが舞台を蹴って決裂って場面も無いわけじゃない。

話はさかのぼる。私が故郷を感じるのは京城の古巣だ。平屋の日本家屋に、朝鮮式暖房 オンドルの間。大便是凍って積もる。チマチョゴリのお手伝いさんが棒で折っていた。父は敗戦の残務で居残り、母と引き揚げた。母は生後間なしの妹をねんねこに包んで胸に固定、背にリュック、両手に荷物。バンドに手ぬぐいを通し握らせる。「離れたらあかんえ」。孤児にならぬよう、強い口調の母の京都弁は今も声が甦る。引揚げ船や引揚げ列車の記憶はない。疲れて眠りこけていたそうだ。

朝鮮戦争で焼け野原といわれた京城に、木造の我が家が残っているはずはない。なのに無性に確認したくなる。折りしも日本の朝鮮併合から百年の節目、2010年。植民地支配の謝罪と古巣確認の旅を決意する。

家は路地の突き当たり。電車道に出ると、景福宮内にある朝鮮総督府（日本政庁）が目の前。塀の上から警備兵が銃を向けていた。この程度の記憶だけが頼りの探索だ。景福宮の塀にたどり着くも路地が見当たらない。行き交う車の激しい流れと騒音に、古巣の記憶がかき消されそう。

後日、同じ時代を京城で暮らした年長の従姉と連絡が取れた。「遊びに行ったから覚えている。町名は孝子洞。青瓦台の傍の電車の終点駅から南へ徒歩5分」と教わる。2年後に再訪。終点駅の跡地から右に政府系施設、左に景福宮の高い塀を見ながら歩く。ぴったり5分で路地を発見。突き当たりの家は洋館になっていた。

♪～～♪～～♪～～#～～♪～～♪

私は酒と煙草とジャズがあれば、それでいい。海外旅行にも関心がない。恥ずかしながら旅券を手にしたのは70歳。職場で古参兵のころ、ジャズを聴くためソニーのウォークマンを購入。それを見た初年兵が「おっ」と声をあげ、「遅れてきたウォークマン」と続けた。うまいこと言いよるなあ。人ごとのように感心する。1周遅れの私らしく、ふるさととは「ならやま」と言えるようにありたい。